〈特集〉

伝統と新しい風

手筒煙火

手筒煙火は、孟宗竹に縄を巻き、火薬を詰めて噴出させる伝統的なもので、東三河や遠州西部で盛んに行われています。江戸時代以来、市内の様々な地域の祭礼で奉納されており、夜空を染める勇壮な火柱が多くの人々を魅了し続けています。

近年、伝統文化の継承が難しくなる中、手筒煙火も担い手が減少するという課題を抱えています。しかし、途絶えることなく伝統美として受け継がれているのはなぜでしょうか。

今回の特集では、受け継がれる伝統の技と、新たな挑戦をする担い手を取材し、人々に愛される伝統、手筒煙火の魅力に迫ります。

伝統美を生む技

～手筒煙火づくり～

手筒煙火づくりは、今でも竹取り、縄巻き、火薬込みなどを自らの手で行う団体が多くあります。そこでは、長い年月をかけて受け継がれてきた技を見ることができます。

加藤芳和さん
（東光町）

良い竹を見極める技

手筒煙火の芯となる竹選びはとても重要です。変形しやすい若い竹ではなく、3年以上経過したものを選びます。曲がったり楕円の竹を選ぶと、火薬を均一に詰め込むことができません。そのため、外周が40チセン以上で、まっすぐに伸びた真ん丸で肉厚のものを見つける必要があります。

竹をよく見て、火薬の勢いに耐えられるものを、丁寧に見極めます。

３年以上経過した、節が白い竹を探します

頑丈な手筒を作る技

脇で抱えたり、手で持ったりする手筒煙火は、竹筒が割れないようにしっかりと保護し、安全を確保する必要があります。そのため、竹に縄などを巻いて竹筒の強度を強くします。

縄が緩んで隙間ができないよう、ゴム製のハンマーで縄をたたきながら、巻いていきます。縄を一気に巻き上げるため体力を要しますが、頑丈な花火をつくるため最後まで手を抜きません。

小野隆弘さん
（御津町）

緩まないよう、縄のよりに沿って巻いていきます

世代を越えて技を伝える

手筒煙火は、竹選びから火薬込みまで、すべて自分でやるのが習わしです。作り方にマニュアル本などはありません。若者たちは、年長者から説明を受け、その場でやる事を見て覚え、長年受け継がれてきた技を体に染み込ませていきます。

こうした面と向き合った作業の中で、今では薄れつつある地域の絆が深まります。誰もが晴れの舞台へと高まる気持ちを抱き、世代や立場を超えた一体感が生まれています。

年長者から若者に口伝えで受け継がれてきた技は、手筒煙火の担い手にとって誇りともいえます。

豪快な花火を咲かせる技

渡邊志宣さん
（国府町）

火柱が高く立ち上がる豪快な手筒煙火を作るためには、花火の噴射口の作り方が重要です。竹の内側に土を盛って厚みを付け、竹の直径に対し、4割の大きさで穴を開けます。この穴が大きすぎると花火が勢いよく噴出しなくなり、小さすぎると爆発する恐れがあり危険です。また、噴射する時に出る火薬のカスが、噴射口にたまると噴射の勢いを妨げるため、穴を末広がりに開ける工夫をしています。

花火のカスが噴射口にたまらないよう、角度に気を付けて穴を開けます

美しい花火に仕上げる技

西川雅陸さん
（国府町）

美しい火花が空高く舞い散る手筒煙火に仕上げるため、火薬の詰め込み方に気を配ります。

輝きを放つ火花になる「鉄粉」と火薬を満遍なく混ぜ合わせ、棒で突いて竹筒の中に均一に詰め込んでいきます。

ちょうど良い案配に固めることで、美しい花火に仕上げることができます。これは、長年の経験を積み重ねることで身に付くものです。

【火薬の込み棒】
手筒煙火の太さ長さに合わせて色々なサイズがあります

火薬を突く音や感触を感じながら、仕上げていきます

夏の手筒煙火を満喫

この夏に行われる市内の主な祭りで、手筒煙火を楽しめる日程を紹介します。

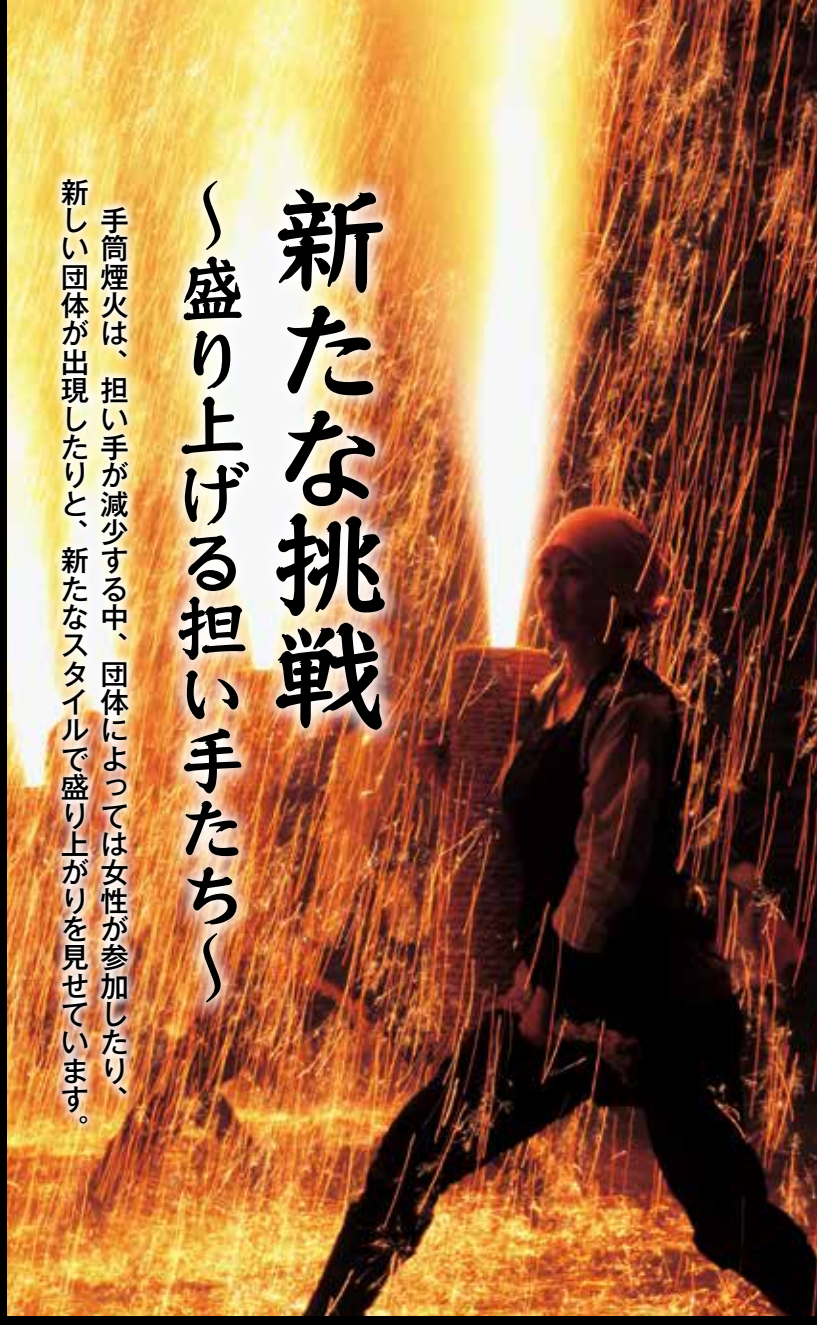
7月 July

〈11日〉天王神社大祭（金沢町）
祇園祭（松原町）
〈17・18日〉豊川進雄神社例大祭（豊川西町）
〈18日〉速須佐之男神社大礼祭（伊奈町）
〈25日〉大社神社臨時大祭（国府町）

8月 August

〈1日〉御油神社例祭（御油町）
御馬祭（御津町）
〈22日〉豊川手筒まつり（諏訪）

手筒煙火と一緒に「綱火」も楽しめます



新たな挑戦
～盛り上げる担い手たち～

手筒煙火は、担い手が減少する中、団体によっては女性が参加したり、新しい団体が出現したりと、新たなスタイルで盛り上がりを見せています。

大きな達成感を味わえます

自分が上げる手筒煙火は全て自分で作ります。手に水ぶくれや傷ができて大変ですが、これも花火を上げる達成感につながっていると思います。初めて花火を上げる前、一瞬怖さを感じましたが、無事終えた時は「自分がやれたんだ」と感激しました。

手筒煙火は女性でも十分できることなので、これから女性の担い手が増えていってほしいと思います。

古橋 彩さん（国府町）
国府町で女性の担い手の先駆け。今年で5回目の挑戦

彩りを添える女性たち

度胸を試すためにチャレンジします

白井雅子さん
（御津町）
御津町で抱える手筒を上げる唯一の女性

自分の度胸を試したくて、手筒煙火にチャレンジしています。花火の最後の「ハネ」で味わえる爽快感は最高です。

若者や女性の担い手が増えると、祭りは盛り上がると思います。将来は息子と一緒にやりたいです。

ここに注目！

手筒煙火のクライマックス「ハネ」

手筒煙火の終わりには、ものすごい音と共に足元に火の海が広がります。これは「ハネ」と呼ばれ、火薬の塊「ハネ粉」に火が付き、手筒の底から勢いよく抜けるものです。この迫力に圧倒され、誰もが感動の声を上げます。

手筒を始めてから地域の祭りが活気づいています

平尾直樹さん
（八幡町）
八幡町で、手筒煙火の立ち上げから運営に携わる中心人物

地元の八幡宮のお祭りで手筒煙火をやり始めたのは3年前です。

手筒の作り方は、小坂井町のベテランの人から指導を受けています。初めて手筒煙火が実現した時は、「夢がかなった」という熱い思いが込み上げてきました。

手筒煙火を始めてから、たくさんの人がこの祭りに集まるようになり、今年は300人以上の人で境内がにぎわいました。また、昨年からは、豊川手筒まつりにも参加しています。今は、私の友人を中心とした15人の団体ですが、技術を習得したら、新しく八幡に住むようになった人へも伝えながら、団体を発展させていきたいです。

八幡町の団体の法被

ここに注目!

「そろいの装束」

各団体には、法被など、そろいの装束があります。同じ装束を身にまとい一同が集まると、団体の絆を感じさせます。

新しい担い手たち

市外からも挑戦します

横山 誠さん
（岡崎市）
手筒煙火に憧れ、市外から参加

テレビで、手筒煙火を見て、火の粉をかぶりながら、手筒を手に立つ勇敢な姿に惹かれました。偶然にも、職場の先輩の中に豊川市で手筒煙火を上げている人がいて、今回、初めて手筒煙火づくりからすべて、一緒に参加をさせてもらいました。以前にも、名古屋や尾張旭から参加した人がいたそうで、私も快く仲間に入れてもらえました。実際に上げた後は、感動でいっぱいでした。これからも、参加したいです。

人々を一つにつなぐ手筒煙火

田中孝嗣さん
（美幸町）

手筒煙火の担い手は、年々少なくなってきています。だからこそ、伝統を伝える立場になった今、若い人たちに参加してもらい、何年やっても奥の深い手筒煙火の醍醐味を味わってもらえるよう、後進の育成に力を注いでいきたいと思います。

手筒煙火が噴射する数十秒間は、上げる人も見る人もそこに注目し一つになります。人と人とをつなぐ、この素晴らしい伝統をこれからも守っていきたいです。